

ヘブル人への手紙3章13節 「心が頑なにならないように」

1A 「今日」に聞く御声

1B キリストの約束と希望

2B 御霊の導き

2A 日々の励まし合い

1B もうひとりの助け主

2B リベカを励ましたしもべ

3A 罪の惑わし

1B 苦しみや試練

2B 不信仰

4A 頑なな心

1B 聖霊に対する逆らい

2B 信じられない心

本文

ヘブル人への手紙3章を開きましょう。私たちの聖書通読の学びはヘブル 2 章まで来ました。午後礼拝で、3 章を一節ずつ学びます。今朝は 13 節に注目します。「**「今日」と言われている間、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされて頑なにならないようにしなさい。**」

すごく恥ずかしいことを、ちょっとお話したいと思います。夫婦の会話です。私は、家事において、主に掃除と皿洗いが分担です。皿洗いについてですが、コンロもきちんと一日の終わりに、夕食の後に拭かないといけません。けれども、時々忘れてしまいます。妻が、いつも、「また、忘れていないじゃない。そうやって、私にやらせるのね。」と言われます。耳が痛いです。やっているつもりですが、うっかり忘れることが、結構しばしばあります。けれども、ここで告白しているのは、忘れないためです。おそらく私の心が次のように頑なになっていくでしょう。「もういいや、やってくれているんだから。居直ろう！」そう、こういった悪い心になって、馬耳東風になって、聞こえなくしてしまうことができます。今朝は、この「御声を聞かないで、心を頑なにする」危険についてお話したいと思います。

1A 「今日」に聞く御声

本文は、鍵かっこで「**今日**」から始まっています。これは、詩篇 75 篇を引用した言葉から来たものです。3 章 7-9 節を見てください。「3:7-9 ですから、聖霊が言われるとおりです。「今日、もし御声を聞かぬら、あなたがたの心を頑なにしてはならない。荒野での試みの日に神に逆らったときのように。あなたがたの先祖はそこでわたしを試み、わたしを試し、四十年の間、わたしのわざを見

た。」これは、イスラエルが荒野の旅をしている時に、彼らが四十年間、放浪したことを思い起こさせているものです。イスラエルの民は、主が良くしてくださって、エジプトから、その奴隷のくびきを碎いて、救い出されました。それにもかかわらず、彼らは荒野において、主に対して不平を鳴らし、心を頑なに立て、それで約束の地に入れずに、死んでしまいました。唯一、信仰をもっていたヨシュアとカレブは入りました。そして、新しい世代のイスラエルの子らが入りましたが、二十歳を越える者たちは荒野で死んでしまったのです。エジプトから救われたのに、その目的である約束の地に入れなかったのです。

1B キリストの約束と希望

ここで手紙の著者は、その時のユダヤ人信者たちに語っているのです。ユダヤ人たちは、イエスを自分のメシアとして信じたものの、困難や試練が続くので、イエス様に信頼して生きる歩みから、距離を取って生きようとしていました。それは、あたかもエジプトから救い出されたのに、主に信頼しない人たちのようにみなしています。約束の地に入るように、彼らには、キリストご自身にあずかる時がきます。主イエスが戻ってこられます。そして天に入ることができます。その希望の約束があるのに、そこから離れていこうとしてしまっているのです。

イエス様ではない、彼らの隠れ場はモーセでした。モーセに神が律法を与えられて、そしてイスラエルの家が建てられました。つまり、ユダヤ人の共同体とその神殿礼拝に戻っているのです。しかし、著者は、モーセよりもはるかにすぐれた方がおられる。イエスなのだと論じているのです。

私たちにも、絶えずこの誘惑がきます。イエス様は言われました、「ヨハ 14:2-3 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意に行く、と言ったでしょうか。わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。」イエス様は、天に神の右の座におられます。けれども、主は私たちのために、天に場所を備えてくださっていて、やがて戻ってきてくださいます。そのことに希望をもって、日々の生活を歩んでいます。

けれども、日々の生活の中で試練が来ます。困難があります。そうすると、自分の信じていることから離れて、今、行っていることにもっと集中しようとしみます。自分の家での生活で、いろいろな責任があります。家事もあれば、親の世話もあれば、孫の世話もあります。仕事もあります。趣味もあるでしょう。友人関係もあります。そうしたことは、決して悪いことではありません。いや、すべて良いものばかりです。だから、そうしたことにもっと集中して、イエス様のことは二の次にしようと心の中で、自分自身を欺いていってしまうのです。

そうして、礼拝さえしていればよいという、形式的なものになります。主に従わない言い訳として、教会の礼拝に来ていれば、とりあえず出席していれば大丈夫だと思います。あるいは、出席もや

めて、「ユーチューブ動画でみことばを聞いていれば、大丈夫だ」とします。礼拝に物理的に来ているのも、またユーチューブ動画で説教を聞くことも、もちろん、それらは良いことです。礼拝を献げるのに、自分のからだを持ってこないといけません。ユーチューブ動画も、日ごろから、みことばに触れることは非常に大切です。けれども、いつの間にか、自分に語られている主の声があるのに、それには従わず、体裁だけ保っていれば何とかかなると思ってしまうのです。これが、ユダヤ人信者が、神殿礼拝をしていれば大丈夫だと思って、イエス様への希望を積極的につかみ取らない言い訳になっていたのです。

2B 御霊の導き

そこで、大事なのが聖霊の語りかけです。7 節の初めが、「**聖霊が言われるとおりです。**」とあります。聖書はすべて神の靈感によって書かれたものですから、聖霊の導きによる言葉です。それと同時に、私たちは、聖霊によって、神のみことばが今の自分自身に語りかけられなければいけません。「**ロマ 8:13-14 もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬことになります。しかし、もし御霊によってからだの行いを殺すなら、あなたがたは生きます。神の御霊に導かれる人はみな、神の子どもです。**」御霊に導かれて、初めて、肉の行いを殺すことができます。そして、御霊の導きによって、自分が神に愛された、神の子どもであることを知ります。ですから、聖霊に導かれて、その時々語られる声を聞いていくべきなのです。

信仰というのは、聞くことから始まるとも、パウロが言いました。「**ロマ 10:17 ですから、信仰は聞くことから始まります。聞くことは、キリストについてのことばを通して実現するのです。**」ですから、自分自身がその時に聞こえてくるものを、その時につかみ取らないといけないのです。それでこそ、御霊の導きに従うことであり、霊的に生きることができるのです。

みなさんの中で、積読する人はいますか？私はまさにそのタイプです。あるいは、見たいテレビ番組があって録画予約するんだけど、どんどんたまっていって、結局見ないままに削除してしまうことはないでしょうか？それは、ためたけれども、結局自分自身の中に入っていないから、無益ですね。同じ過ちを私たちはしてしまいます。主がその日に、その時に語られているのに、なぜか、「これは、後に取っておきます。とっても大切なことであることはわかるけれども、今、そのことに関わったら、自分の生活に支障が来る。」と言い訳をしてしまうのです。しかし、取っておいたら、自分の聞いた声が再び戻ってくることは、かなり難しくなります。それは、あたかも生もののようです。生もの、例えば、刺身であるとか、生クリームを使ったケーキであるとか、すぐに食べなければ、冷蔵庫で取っておいても腐ってしまいます。主が語られることに聞き、従順になるのです。

かつて、大学生のクリスチャンの集まりに訪問しました。そこに、まだイエス様を信じていないけれども、その集まりに積極的に参加している人がいました。彼と会話していると、こんな言葉がありました。「今は、まだ信じない。なぜなら、卒業して、仕事をしてから、それでも信じることができる

かどうかわからないからだ。その時に信じることを決めたいと思う。」笑ってしまうかもしれません。なぜなら、社会人になったら、自分の人生のこと、永遠のいのちのことを考える時間が、普通なら極端に減ってしまうからです。今、信じられなかったら、将来信じられるはずがないのです。なぜなら、その時に主に語られているのに、それを拒んでいることを言い訳しているにすぎないからです。（彼が、それでも神の憐れみで信じてくれていることを願います。）

2A 日々の励まし合い

1B もうひとりの助け主

そこで、著者は、「**日々互いに励まし合って**」とあります。週ごとに励ましあって、ではなく、日々励ましあって、とあります。それだけ、互いに関わりあうように促されているんですね。ところで、この「励ます(παρακαλέω)」という言葉ですが、イエス様が聖霊の約束の時に、「もうひとりの助け主」と言われた時に、助け主と同じ言葉です。「励ます」が、「助け主」の動詞になっています。

つまり、私たちが励ましあう時に、聖霊がその人に語ってくださり、助けられ、励まされるのです。私たちは、自分の言葉で励まし、慰めようとしても、それが力にならないことを痛感します。そして、ヨブ記にあるように、彼の友人が慰めようとしたら、なんと彼を徹底的に責め立てる、役立たずの助言者となってしまいました。私たちは、聖霊により頼んで、聖霊の賜物を用いて、信仰を働かせて励ますのです。そうすれば、その人が自分によって励まされるのではなく、イエスご自身がその人の深い深い部分、霊の部分に触れてくださり、それで力づけられます。

2B リベカを励ましたしもべ

聖霊は、私たちの心に希望を注ぎます。イエス様の希望を注いでくださいます。そばに来て、ともに歩んでくださり、イエス様を見ていこう、この方に間もなく会えるのだよと言ってくださいます。

アブラハムの子イサクのことを思い出してください。彼のお嫁さんを探すために、アブラハムは自分のしもべを、親戚のいるアラム人のところに遣わしました。そして、リベカを見つけたのです。リベカは、すぐに、しもべについていくことを決めました。イサクが自分の夫になることを思い抱きながら、長い長い旅に出たのです。アラムは今のシリアです。そこからイサクのいるところ、ベヘル・ラハイ・ロイは、イスラエルのかなり南部のところですが、しもべは、らくだに乗っているリベカに、何度となく話しかけたことでしょう。イサクのことをいろいろ、語ったに違いありません。そうやって励まして、無事に、イサクのいるところまで行くことができたのです。（創世記 24 章参照）「エペソ 1:14 聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証」とあります。御国に行くまで、確かにあなたは、キリストにあずかることになるのだと、保証となってくさるのです。

3A 罪の感わし

そして、「**だれも罪に感わされて**」と言っています。罪に感わされるとは、ここでは、どういうこと

か？何か、嘘をつくとか、怒り散らすとか、そういった個々の罪ではなさそうです。12 節を見ると、「**不信仰な悪い心**」と書いています。罪と言っても不信の罪です。

1B 苦しみや試練

先に、ユダヤ人の信者が、不信者の同胞から迫害を受けていたこととお話ししました。その中で、受けている圧迫に耐えられなくなっていったのでしょう。そして、自分の心を主に対して閉ざしていったと思われます。

苦しみや試練に会うときには、一つの分かれ道が出てきます。自分がどのように応答するかによって、正反対の方向に導かれます。一つは、苦みや心の頑なさに、もう一つは、清めです。試練について、ヤコブがこう書きました。「ヤコブ 1:2-4 私の兄弟たち。様々な試練にあうときはいつでも、この上もない喜びと思いなさい。あなたがたが知っているとおり、信仰が試されると忍耐が生まれます。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは何一つ欠けたところのない、成熟した、完全な者となります。」信仰が試されると、忍耐が生まれます。その忍耐を働かせると、品性が生まれます。そしてその品性の中で、真実に神に期待する希望が生まれます。そうやって成熟へと向かうのです。

けれども、その逆もあるのです。それは、神は良い方である、いつくしみ深い方であるという真理から離れて、今、神は自分に苦しみを与えているだけなのだと、疑うことです。それで、苦みが心に芽生えて、神とはあまりかかわらないほうがよいと考えるのです。これが、神への不信の罪です。表面的には、自分がまだ信仰を持っているかのようにふるまうかもしれません。けれども、その行いには、主に対する信頼がまるで見えなくなってしまうのです。

2B 不信仰

不信仰の罪ほど、深刻なものはありません。ここで大切なのは、繰り返しますが、知的に同意していることが信仰ではないことです。知的には同意しているかもしれないけれども、心で主に信頼を寄せていることが、信仰です。それがないまま、過ごしていくことを不信仰と言います。

不信仰こそが、あらゆる罪の源泉です。「ヘブル 11:6 信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神がご自分を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです。」神がおられること、神が求める者に報いてくださる方であることを信じなければならないのです。

詩篇には、いかにも滑りそうになった人がいました。もう信仰を捨ててしまうかもしれない人がいました。礼拝を導く奉仕者アサフです。73 篇で、彼は、「73:15 もしも私が「このままを語ろう」と言っていたならきっと私はあなたの子らの世代を裏切っていたことだろう。」とまでいっています。しか

し、彼は主に戻ってくることができました。なぜか？冒頭で彼はこう言っています。「まことに、神は
いつくしみ深い。イスラエルに、心の清らかな人たちに。」いつくしみ深さを彼は忘れていなかった
のです。主は良い方であり、決して私たちに悪いことをしないことを知っていれば、たとえ、自分が
滑りそうになっても、いや滑ってしまっても、立ち直ることができます。

だれが、いつくしみ深くない方のところに、自分が戻ろうと考えるでしょうか？できませんね。その
不信が、致命的な罪なのです。あの、タラントの譬で、地に一タラントを埋めた人が、なぜそんな
ことをしたのか主人に話している言葉があります。「マタ 25:24 ご主人様。あなた様は蒔かなか
ったところから刈り取り、散らさなかったところからかき集める、厳しい方だと分かっていました。」厳
しい方だと言っています。だから、この一タラントには関わりたくなかったのです。この神に対する
不信の源泉は、悪魔です。蛇がエバを惑わしたときの言葉を思い出してください、「創 3:5 それを
食べるそのとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになって善悪を知る者となることを、神は
知っているのです。」神が意地悪して、善悪の知識は神だけに留めたいと思っていると吹き込んだ
のです。だから、私たちは確信に留まることの戦いの中にいることを知らないといけません。

4A 頑なな心

そして、「**頑なににならないようにしなさい**」と戒めていますね。頑なになるというのは、旧約聖書で
は、うなじをこわくする、という表現でも出てきます。牛がくびきをかけられるのを拒んで、意固地に
なっている姿です。イエス様のくびきがあるけれども、それをかけられたくないと拒んでいる姿です。

1B 聖霊に対する逆らい

そうしているうちに、痛みがなくなり、無感覚になっていきます。頑なになるだけでなく、心が硬く
なっていくのです。ちょうど、ギターを弾いている人が指先で弦を押さえる時に、柔らかいままだと
痛くて仕方ありません。何度も弦を押さえている中で角質が厚くなっていて、それで触感が鈍
くなります。それで弾けるようになりますね。昔はベンタコというものがありました。ペンを持ちすぎ
て、指の関節の部分が硬くなることです。それで針でそこを刺しても、痛みを感じません。

それが、心の中に起こってしまいます。私たちが、御声を聞いたときに、その時に聞いて、従わ
ないと、その分、心が硬くなるのです。そして、何度も何度もそれを行っているうちに、ついに、御
声を聞くことのできない状態に陥ってしまいます。ステパノがサンヘドリンで弁明をした時、そこに
いる者たちに、こういいました。「使 7:51 うなじを固くする、心と耳に割礼を受けていない人たち。
あなたがたは、いつも聖霊に逆らっています。あなたがたの先祖たちが逆らったように、あなたが
たもそうしているのです。」頑なにすることを、うなじを固くしており、それで心と耳に割礼を受け
ていないと言っています。男性の性器の包皮がかぶされたままで、感触が鈍くされていると同じよう
に、心に包皮ができて、神の御声に鈍くなっているのです。

2B 信じられない心

そうすると、信じられない心にまでなってしまいます。ヨハネは、当時のユダヤ人指導者たちが、意固地に信じなかった結果、信じられなくなっていったという経緯を説明しています。「ヨハ 12:37-40 イエスがこれほど多くのしるしを彼らの目の前で行われたのに、彼らはイエスを信じなかった。それは、預言者イザヤのことばが成就するためであった。彼はこう言っている。「主よ。私たちが聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕はだれに現れたか。」イザヤはまた次のように言っているのです、彼らは信じるができなかったのである。「主は彼らの目を見えないようにされた。また、彼らの心を頑なにされた。彼らがその目で見えることも、心で理解することも、立ち返ることもないように。そして、わたしが彼らを癒やすこともないように。」」信じなかったのです。それから、信じることができなかった、とあります。イザヤ書をヨハネは引用していますが、初めのほうは「信じない」ことについて、そしてもう一つは、主ご自身が彼らに見えないようにされた、聞こえないようにされたことが書かれていますね。

これが、エジプトのファラオに起こりました。モーセが、神の民を出ていかせよという主のことばを伝えると、ファラオは何度となく、「心を硬くし」と書いてあります(出エジプト 8:32)。けれども、最後のほうでは、主ご自身が彼の心を硬くしています。「主がファラオの心を硬くなにされた(10:27)」とあります。これはどういうことか？主は、自由意志を尊ばれます。ですから、拒むことも、尊ばなければいけません。それで、そのどうしても強情になっている人には、その頑ななままにしておかれるという判断を下されます。主は、むしろ、その頑なさをういて、ご自分の栄光を現そうとされるのです。その頑なにするということを、そのままにさせていくのが、主が頑なにするということです。

これは、大変危険なことです。私たちが主の御声に意図的に従わない時に、私たちが立ち止まって、へりくだって、主の前に罪を告白します。本当に悔い改めます。心から罪を悲しみます。そして、罪を離れます。主は憐れみ深い方です。憐れみを豊かに注いでくださいます。ちょうど放蕩息子のように、そのままのあなたを迎え入れてくださいます。そして、再び神の恵みが降り注がれます。決して、主に不信になってはいけません。どうせ、やり直しはできないのだと思ってはいけません。それが、ここで警告されていることです。イエスのみに、いのちの源泉があります。